

教育のひろば

教育ジャーナリスト

池田知隆

定住外国人に開かれた学校づくりを

多文化共生教育の明日を拓く

稲富進さんに聞く

いま、日本の学校では多様な民族的マイノリティの子どもたちが学んでいる。それらの子どもたちと、日本人の子どもたちとの相互理解を深める教育をどのように進めていけばいいのか。日本社会の外国人をめぐる報道では、外国人がかかわった犯罪や「不法」滞在、「不法」就労などが目立ち、必ずしも好印象を抱かせるものではない。多文化共生社会にむけての教育の課題について長年、日本人教師として「在日朝鮮人教育」運動にかかわってきた稲富進さんに聞いた。



急激に進む国際化

——いま、何をされておられるのですか。

◆JR大阪駅近くの駅前第2ビルに「よみかき茶屋」という名の識字・日本語教室があります。そこで、毎週金曜日の午後、ボランティア講師をしています。日本社会もグローバル化が進んで来日(滞日)外国人が急速に増え、中国やタイ、フィリピン、ネパールなどのアジアや南米のブラジル、ペルーから来日した人がこられています。みんな真剣で、熱心ですよ。



△稲富先生とは、天王寺夜間中学の教師をされていたときに出会い、約30歳になったいまも衰えていない▽

夜間中学を卒業して、もっと勉強したいとがんばっている在日朝鮮人のハルモニ(おばあさん)たちもいます。みなさん、教室に来るのを楽しみにしているようです。

——いま、定住外国人に地方参政権を付与するのか、高校授業料無償化の対象を朝鮮学校にも及ぼすのかなどをめぐって大きな関心が集まっています。民主党政権に変わり、どのような多文化共生社会をつくるのが現実的な課題となってきましたね。

◆日本社会のあり方が、国際的な人権の視点から厳しく問われてきています。多様な民族の人々と共に生きる社会が現実になっているのに、それらの子どもたちの民族的な文化の多様性やアイデンティティを尊重するような視点での施策ができていません。

——公教育とはなにか。「国民教育」

と「多文化共生教育」をどう考えるのか。日本の国際化の課題がくっきりと明らかになりましたね。

◆日本にいる外国籍の子どもたちが日本の学校で学ぶのは、あくまでも「恩恵」とされ、日本の学校・社会への「適応教育」の視点からしか目をむけていません。その根っこにあるのは、自民族中心主義というか、日本民族優越の考え方が乗り越えられていないよ

海の恵み にがりを残した

ほかつ
伯方の塩®

※伯方の塩®は、自然の風と太陽熱で蒸発結晶させたメキシコまたはオーストラリアの天日塩田塩を日本の海水で溶かして原料とし、CO₂の排出を少なくしています。



ほかつ
伯方塩業株式会社

〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目4-9
TEL089-911-4140(代) FAX089-923-9671
ホームページ <http://www.hakatanoshio.co.jp/>

うに思います。日本も批准している「国際人権規約」や「国連子どもの権利条約」では、その国に住む外国人に

対しても「教育の機会均等」や「民族の歴史、言葉や文化を引き継ぐ民族教育の権利」を保障する義務を明文化し

ています。人権の国際基準に近づいてほしいと期待しています。

一 女生徒の告発から

——在日外国人、なかでも在日朝鮮人教育にかかわってこられ、もう40年余りになりますね。そのきっかけはなんだったのですか。

◆そのときの光景が今もよみがえりますが、1968年の10月のことでは

た。当時勤めていた大阪市立城陽中学校で、被差別部落や障害者への差別問題など人権学習に学年全体で取り組んでいました。それまでの学習のまとめの学年集会でひとりの在日朝鮮人の女生徒、A子がこう訴えました。

「私はいま、進学する学校を決めるのに悩んでいます。私立高校のほとんどが朝鮮人生徒の受験を認めていません。認める学校があっても、入学金や施設協力を日本人と差をつけると聞きましたが、それは本当ですか。それは朝鮮人差別です。稲富先生、答えてほしい！」

大きな声ではないが、訴えというよりは告発といったような発言に、その場の雰囲気はそれまでの積極的で活発な空気が重苦しいものに変わり、静まりかえりました。私はただ呆然と立ちつくし、だれひとり答える教師はいませんでした。その追及は事実であっ

たし、当時の教育界ではごく普通のことだったのです。

——差別事象にどう向き合うのか、生徒たちに教えてきた教師が逆にその問題を突き付けられわけですね。教師としてどうしていくのか、と。

◆その告発に答えるかたちで、大阪市教組から当時の大阪教職員組合（大教組）の行動へと広がり、私立高校連盟と大教組との話し合いが数回にわたって重ねられました。結局、「翌1969年度の入試から、外国人の受験について門戸を開放する」という回答をひきだして運動は終息しました。

——女生徒の訴えが実を結び、よかったですね。

◆しかし、私にとっての問題は何ら解決されないうままでした。私立高校の入試差別の実態を知らながら、生徒に問題提起できなかったばかりか、何の疑問も持っていなかったという自分を





どう考えればよいのか。社会科教師として人並み以上に努力してきたと思いや自負がありましたから。それが元から崩されました。

△そして1971年9月、「公立学

校に在籍する在日朝鮮人子弟の教育を考える会」(後に「日本の学校に在籍する朝鮮人児童・生徒の教育を考える会」と改称)を発足させ、74年に天王寺夜間中学に転勤▽

——夜間中学の体験から教育運動へのこだわりを強くされたのですか。

◆その夜間中学では、それまでの私の世界とは全く異質な△学び▽の世界に出会いました。在籍する生徒の半数以上が在日朝鮮人のオモニ(母親)、ハルモニたち、また平均年齢52歳を超えているのに驚きました。「あいうえお」の「あ」はこう書くのですよ、と中学校でありながら、こんな勉強から始めることを余儀なくされました。自主的に教材を作成し、授業を進めたら、「プリントでなく、教科書を使って教えて!」とオモニたちが迫ってくるのです。「小さいころから学校へ行きたい、行きたい。教科書を開いて勉強している姿を何度も夢に見た学校の勉強ですよ。教科書で教えてください」と。書物で学んだ日朝関係の歴史を夜間中学のオモニ、ハルモニという生き証人から「確かな歴史認識」として学び、「人間に学ぶ」ことの大切さを思い知らされました。

Good Day Good Bread

食卓でのいい出会いを大切に、
気分のいい食事から一日を元気に
弾ませたい。ヤマザキはそう願って
パンをお届けしています。

 ヤマザキ

www.yamazakipan.co.jp



郷土へのこだわり

——教師としてどう生きるのか、そのことへの思いをとても強くもっておられますね。

◆40年という歳月はやはり長いのですかね。市民的な生活の権利や民族的な権利の保障を目指して行政への要請、折衝など、その時々の問題への対応が求められ、いつも全力投球してきました。私としては自然な歩みでしたが、ただ、私の内面に宿る島人（しまんちゅ）特有の意識がはたらいていたのかもしれない。

——たしか奄美・徳之島のご出身でしたね。

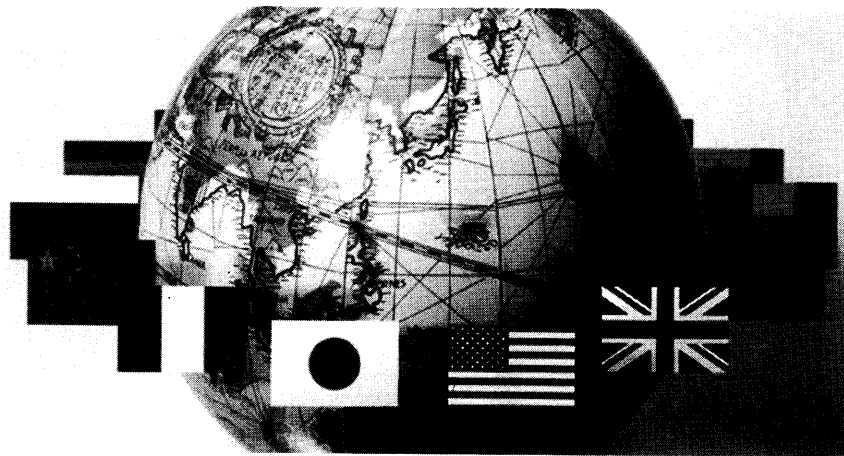
◆私は、生活の基盤を内地・大阪にもとめた島人の父・母のもとで育ちました。ふるさと奄美はそのときどきの支配者の圧政に苦渋を強いられた歴史があります。とりわけ米や砂糖を搾取し続けた薩摩藩の圧政、鹿児島県に属した近代以降もヤマト（内地＝本土）と異なる収奪と切り捨ての差別政策で圧政は続きました。さらに戦後も1953年まで軍政が敷かれ、返還が遅れ

ました。自由往来が禁止されるなど、島人は想像を超える苦難の生活を余儀なくされたのです。

——そのような島の歴史やそんな人々の生き方に触れずして稲富先生の生き方も語れない、ということですね。

◆そうです。内地に新天地を求めた島人が大阪や阪神間に住んで、生活の基盤を築きました。沖縄の人々は大阪市大正区の小林町、奄美・徳之島の人々は大阪市城東区の今福、府下の泉大津市、忠岡町のあたりに基盤を築きました。内地の人々の偏見、差別を島人の固い絆、相互扶助によって切り拓いたのです。教師生活を振り返ってみると、被差別部落の子どもたちの家庭環境、朝鮮人生徒に対する進路差別、夜間中学のオモニたちが語った生活史、そのいずれもが私自身や島人がおかれた環境、生活史と重なり、私の内面をゆさぶりました。そんなことが私の内面に情念となって教育運動へ突き動かしていたようです。





「砂漠に水をたらす」試みから

——教育運動に対する周りの教師たちや行政の理解が進みましたか。

◆運動を始めた1970年代の初めのころは、私たちの問題提起に対して「朝鮮人児童・生徒に教育的配慮は要らない」「日本人の教育も十分にできないのに外国人教育など余計なことをやる必要はない」など、朝鮮人迷惑論ともいえる意見が多くの学校や地域から聞こえてきました。そんな様子に「不信感」をもつ朝鮮人の親たちの厳しい言葉に頭を抱えこみながら、それでも家庭訪問で親たちと語り合いました。シンポジウムを開いている人々たちとの交流を、試行錯誤を積み重ねてきました。そんな「砂漠に水をたらす」ような取り組みから始まった運動でしたが、80年代には大阪で飛躍的に教育実践が広がっていきました。

——行政はどのように対応していききましたか。

◆大阪市教育委員会は92年に「民族クラブ技術指導者招聘事業」という施策を策定しました。これは20年にわたっ

て「民族学級を指導する民族講師の措置とその身分保障」を求めてきた私たちの要請に応えたものです。「民族学級」は朝鮮人の子どもたちが「同胞民族」として出会い、つながり、民族としての自覚や誇りを高める大切な「場」として取り組まれてきました。そこでボランティアの活動としてかかわってきた民族講師の身分の保障を求めてきたのですが、教育委員会がそのような施策をとったことで民族学級の取り組みが拡大しました。現在、大阪市内で民族学級を開設している学校が105校、大阪府全体では170余の学校で朝鮮、中国をはじめとする外国にルーツをもつ子どもたちが活動しています。教育条件の整備がこの教育実践の広がりへと深まりを支えているのです。

——長年の教育運動の成果が着実に実ってきているようですね。

◆「砂漠に水をたらす」ような試みがようやく「水脈」にはなりました。

「考える会」や「全国在日朝鮮人教育研究協議会（全朝教）」が重要な柱と



して取り組んできた課題として「公立学校の教員採用」の問題があります。74年に韓国人女性が教員採用試験に応募し、日本国籍者に限るとした「国籍条項」の問題も30有余年を経て、現在は大阪府・市で約100人の外国籍教員が「常勤講師」として教壇に立っています。

さらに大阪市教育委員会は2001年に「在日外国人教育基本方針——多文化共生の教育をめざして」を策定しましたが、その年には大阪府、奈良県をはじめとして9府県、約60を超える地方教育委員会が「在日外国人教育」にかかわる基本指針（指導指針）を策定しています。このような施策を大阪府、大阪府は胸を張って発信してほしい。文部科学省も「国民教育」を転換して「多文化共生教育」に視野を置いた施策をすすめてほしいと思います。

——日本の学校でも外国人がずいぶん増え、多様化しました。多文化共生教育として今、求められている課題はどんなことでしょうか。

◆確かに日本社会の外国籍の人々は多様化し、学校の様子も様変わりしました。在日外国人といえれば朝鮮人という時代から多様な民族との共生が求め

られる時代です。なによりもまず、日本人の子どもにも、多様な民族の子どもたちがそれぞれ異なった文化で育った友人であり、そのことを受け止め、自らの文化と同様、異なる文化を尊重すること▽をいろんな教育活動の機会に指導することが必要だと思います。

——そのように言うのは簡単ですが、実際はそう簡単ではありませんね

◆日本社会ではまだまだ、自民族中心の法律や制度、システムが残っていて、それが自覚的に捉えられています。それは子どもの世界にも浸透し、そうした意識が払拭できていません。「ここは日本だぞ。ちゃんと日本語をしゃべれ！」と言ったり、宗教上の理由で食べられないことがわからないまま「給食はちゃんと食べろ！」という雑言をはいたりしたことがきっかけに喧嘩になる——といった報告にもそのような意識が映し出されています。

その取り組み方としては、民族的マイノリティの子どもたちにも自分のルーツを隠すのではなく、自尊心をもって自分を語る▽ことを目指すことが大切で、在日朝鮮人教育が積み重ねてきた「民族学級」などの実践があります。日本人の子どもも集団に埋没させ

るのでなく、「民族同胞の集まり」、ごく少数であれば「国際学級」などをつくり、地域と学校が連携していくこと

——日本では被差別地区とされてきた地域の生活環境も改善され、同和教育や外国人教育をめぐる意識もずいぶんと変わってきました。

◆まず教員の世代構成がガラリと変わりました。いわゆる「団塊の世代」が現役を退き、若い世代にさまざまに取り組みを引き継いでもらわなくてはならなくなりました。大学で教えているときにも感じていたことですが、若い人たちはそれまで学習してきた知識で表面の現象を理解する力も持っているけれど、その背景の因果や相互の関係をとらえていく学力が低下しているように思います。人間にとっての大切なことや根源的な問題に迫っていく態度が非常に弱くなっているようです。私自身は「目の前の子どもを見る確かな眼をもとう」とか「しんどい子どもをクラスを中心にすえて」などを実践の軸に据えて、教育を考えてきました。

が必要です。日本語指導にとどまらず、母語や民族文化を保持し、民族としての自覚や誇りをもって生きる子どもを

子どもたちへの「確かな眼」をもつためには、教師が自らの生きてきた道を振り返り、葛藤などをしながら不断に蓄えていかなければなりません。

——稲富先生のようなこだわりをもつ教師が少なくなってきたように思います。

◆周りを見回してみると、夜間中学など厳しい教育現場にかかわるのは高齢の教師たちばかり。若い教師がいません。特に「団塊の世代」の教師たちがいつせいに退職してしまっただと、どうなるのか。

平和教育や人権教育などに取り組む後継者をどのように育てていくか気がかりです。

外国人に同化を強いる教育行政の厚い壁と、日本社会にひそむ外国人に対する排外、差別の意識や構造は、依然として立ちほだかり続けています。このような状況をつき抜け、多文化共生

対話を重ねながら

育てることを目指してほしい。

社会への新たな展望をきりひらいていきたいですね。それにはまず地域や学校で多様な人たちが十分に対話を重ねていくこと、それに期待を寄せるよりほかありません。

略歴

稲富 進（いなとみ・すすむ）

1932年、鹿児島県徳之島出身。大阪学芸大学（現大阪教育大学）卒、京都大学教育学部研修課程修了。大阪市立難波中学、城陽中学を経て天王寺夜間中学に勤務。「日本の学校に在籍する朝鮮人児童・生徒の教育を考える会」、「全国在日朝鮮人教育研究協議会」などの結成に参画し、代表になる。大阪教育大、関西大、近畿大などで教壇にたった。主な著書に「ムングファの香り——在日朝鮮人教育研究協議会の軌跡と展望」「文字は空気だ——夜間中学とオモニたち」「多文化共生教育の明日を拓く」など。

教育の広場

●定住外国人に開かれた学校づくりを
多文化共生教育の明日を拓く 稲富進さんに聞く 4

NEWS ROTARY

2010

5

CONTENTS

●どうなる日本のマクロ食文化 クロマクロの漁獲規制強化は回避されたが…	12
血糖値が気になる方向けの特定保健用食品（トクホ）	20
現代人のニーズに応える新宅急便	24
アンチエイジングとヘーゼルナッツの有用性	28
まちがいのない補聴器選び	32
平成22年度 奈良県立民俗博物館の年間行事と花だより	62
伯方の塩でクッキング	63

REGULARS

女性ホルモンの神秘と効用	19
医療事情のウラオモテ—睡眠時無呼吸症候群(3)—診断と治療法について	37
なまずのひとりごと—自然のままに	42
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？—蝶道と行動学	45
たかが われらが日々？—オリンピックと国母選手と朝青龍	46
回虫博士の世界漫遊紀行—顔から皮膚から「ばっちいもの」健康学	50
あのときこんなこと	54
暮らしいきき衣・食・住—長生きする入浴の方法（後編）	64
旅と宿—体験の宿—宿坊	68
奈良歴史散歩—1300年の寧楽(4)—平城京物語（上）	72
L I B R A R Y	76
5月の運勢	81
編集後記	82

表紙写真 森村 進

